

東京双松会会報

発行 東京双松会事務局 (中央印刷事務器株式会社内)
 TEL:03-3265-4858 FAX:03-3265-4859 URL:http://www.tokyo-soshokai.org/
 印刷 中央印刷事務器株式会社

『人生の原点 — 北高』

会長 芦田 昭充(第13期 昭和37年卒)

現在、我が国の経済は順調に伸びつつあります。これまでに発表された3月期決算会社約1600社の経常利益は対前年比35%上昇しており、純利益ではなんと59%も増加しております。何といたってもアベノミクス効果が大きく、企業の業績を大きく押し上げたと思います。また、賃上げも久しぶりになされました。一方、消費税が上がったということで年金を主たる収入とされている方々は大変だと思いますが、国の力の持続性という観点から見ればやむを得なかったのかなと思っています。経済成長を通して国民全般に万遍なくその効果が行き渡ることを期待しています。

昨年12月3日、河原校長(当時)のご要請により、松江北高校で1年生、2年生の在校生、約400人を対象に講演を行いました。テーマは「人生はチャレンジの連続(Excitingで面白い、やり甲斐がある)」というものです。主として、社会人になってからの経験の話でしたが、私の生き方の一つである「破天荒」ということを材料にしました。破天荒の中国語の本来の意味は「誰もやらなかったことをやる」というものです。日本語では少し否定的なニュアンスで使われていますが、中国語の本当の意味で私の経験を話しました。

そして、アドバイスとしては、

- 1) 良い大学に入ることが全てではない。人間の能力は様々であり百人百様。テストに現れる能力はそういう能力の極く極く一部。その能力が開花するのが早い人もおれば遅い人もいる。努力すれば必ず咲く。しかし、今はしっかり勉強して下さい。
- 2) 世の中は広い。人間到る処青山あり。活躍する場は色々な所にある。
- 3) 高校1年生の時の漢文の副読本の中にあった王陽明の「知行合一」。

——これは私の座右の銘でもありますが、現在は高校生で「知」を学んでいるが、社会に出た時「知っている」ということだけではあまり意味をなさない。行動を伴ってこそ本当の価値が出てくる。

- 4) 今の時代はゲーム機等で一人でも遊べるが、部活動を通したり、人との接触を増やすことがより重要。世の中に出たら全て人と人との交わりである。すなわち、対人能力が問われる。

……等々を述べました。

さて、東京双松会の行事としては、去る3月8日(土)、太平洋クラブ成田コースに於いて、初のゴルフ大会が開催されました。参加者はわずか8名でしたが、和気あいあいとした

雰囲気の中で楽しくプレーを致しました。第二回東京双松会ゴルフコンペは9月2日(火)、晴天の下、藤ヶ谷カントリークラブで開催されました。平日開催にもかかわらず7名が参加し、存分にプレーを楽しむことができました。

松江北高校の校長も務められた兼折先生がご逝去されました。私は2年生の時に国語を習っていました。また、陸上競技部の顧問として色々な大会にご出席いただき、臆気な記憶で間違っているかもしれませんが、いつも第二コーナーに立って選手を温かく見つめていた記憶があります。

少し旧聞に属しますが、東京双松会のホームページに8月生の木下勲様が「松江北高校故地を訪ねて」と題して投稿されています。その中で松江北高校跡地の碑があり、兼折先生の詠まれた「若かりし日の わが夢ぞ そこに狭霧(ささろ)ふ」と刻まれており、背面には兼折先生の文が刻まれています。私も一度訪れたいと思っています。

山陰中央新報の報道によれば、日本人初のノーベル文学賞受賞者である川端康成の旧制中学時代(大阪府立茨木中学の英語教師、倉崎仁一郎氏が旧制松江中学(現松江北高校)の卒業生であることが報じられています。大作家となった川端にとって倉崎氏は大きな存在であり、「倉っさん」と呼ぶなど強く慕っていたが、川端が5年生の時倉崎氏が急死され、その葬儀に因んだ事柄が「雪國」及び他の作品の中で触れられているそうです。

また、先日、高円宮家の典子様が出雲大社禰宜(ねぎ)の千家国彦氏との婚約が内定したと報道されました。ジャーナリストの櫻井よしこ氏によれば、ご皇室は現在125代の天皇、出雲大社の宮司は国彦さんの父、尊祐氏で84代となり双方2700年の歴史を持つ家系だそうです。出雲人として誠におめでたく、喜ばしい限りです。

最後に、松江高校1期生が親睦を深めるために「隠居村」という集りを結成されて頑張っているらしいと伺っておりますので、我々若手(?)も負けずに頑張らなければなりません。

(株式会社 商船三井 相談役)



平成25年度総会報告

平成25年10月19日(土)、アルカディア市ヶ谷(私学会館)において第58回東京双松会総会および懇親会が、母校、双松会、近畿双松会からのご来賓を含めて約100名の参加を得て盛大に開催されました。

常松治郎さん(H5年卒)の司会により始まった総会ではまず、泉宏佳さん(S38年卒)の後任として事務局長に就任された中村康一さん(S40年卒)の開会の辞に続き、芦田昭充会長(S37年卒)が挨拶されました。その中で芦田会長は、2020年の東京オリンピック招致に触れ、前回の東京オリンピックは夜行列車で上京して僅か1日しか観戦できなかったが、今回は今から健康に留意して多くの競技観戦を楽しみにしていること、加えてオリンピック招致による経済効果とアベノミクスがもたらす日本経済の明るい見通しについても話されました。



河原松江北高校長

ご来賓として登壇された河原一朗北高校長(当時、S47年卒)は、スポーツ・文化両面にわたる最近の母校生徒の大活躍の様子を披露され、今後とも校訓である「質実剛健・文武両道」のもとで頑張っていくとの決意を述べられました。

次いで庄司肇双松会会長(S35年卒)は、我々の大先輩であり、戦時下で幻に終わった東京オリンピック招致のために奔走された岸清一先生の没後80年を機に近日中に顕彰式典を行うこと、平成22年に植え替えた双松の1本が枯れたため双松の系統を引く若い松を再度植える準備中であることなどを話されました。

ご来賓の方々のご挨拶のあと、泉前事務局長による24年度の活動報告、前島紀夫幹事(S38年卒)の会計報告、島村武宜監事(S38年卒)の監査報告があり、満場一致で承認されました。

続く恒例の講演では、理学博士である野崎保さん(S40年卒)が、これまで多くの災害現場を見て来た経験に基づく地質学者の観点から「自然災害と地質リスクの軽減～我が国の抱えている問題点と“地質屋”の役割～」というテーマで、専門的な内容を大変わかり易く説明されました(講演者への取材と講演の概要は次ページの「寄稿」をお読みください)。講演が終わったところで懇親会に移り、かつてバレー部で活躍された石原道央さん(S26年卒)のご発声による乾杯の

あと、食事を楽しみながらあちこちに懇親の輪が広がり、最後に「赤山健児の歌」「山脈浮かびて」を大合唱し和やかなうちにお開きとなりました(なお、総会・講演・懇親会の様子は東京双松会のホームページに詳しく掲載されています)。

第一回東京双松会ゴルフコンペ

平成26年3月8日(土)、太平洋クラブ成田コースに於いて幹事待望(笑)の第一回東京双松会ゴルフコンペが開催されました。

実は今年2月、関東各地が未曾有の大雪に見舞われ、当初予定していたコースがクローズとなり、とうとう開催直前に代替コースを探すこととなりました。しかし、先方のご尽力により、直前にも関わらず素晴らしいコースが確保でき、当日は曇りつつない快晴の下、男性6名、女性2名計8名にご参加頂きました。初対面の方もいらっしゃいましたが、そこはすぐに打ち解け、終始和やかな雰囲気でも気持ちいあいとプレーを楽しみました。

皆さん、東京在住期間が長いので、出雲弁飛び交うまでは至りませんが、赤山校舎や川津校舎の話、部活の思い出、実家がご近所さん同志だったという新発見もあり、一日中しゃべり続きのラウンドとなりました。プレー後は表彰式懇親パーティーが行われ、大方の予想通り、優勝候補大本の芦田昭充会長がベスグロ優勝と完全制覇を成し遂げられました。また、準優勝は堅実なプレーが光った田中稔さんが事獲得されました。レディース部門は宮城由美子さんが制され、準優勝は川上経子さんが獲得されました。各賞に島県選べるギフトセットをはじめ郷土色満載の景品を手にした参加者の皆さんは、今年9月2日に第二回コンペを開催することとし、会はお開きとなりました。



まだまだ生まれたばかりの東京双松会ゴルフコンペです。会員皆様の交流の場として拡大、継続して開催していきたいと思っております。皆様、是非お気軽にお問い合わせ、ご加ください。ご連絡お待ちしております。最後に、つたな幹事にご協力頂いた皆様、御礼申し上げます。我々松江北卒業生の持つ人脈は、とてつもなく広くて太いものであり、これこそが東京双松会の財産であると改めて認識させて頂きました。本当にありがとうございました。

コンペ幹事 高根護康(S55年卒)

寄稿

— 野崎 保(第16期 昭和40年卒) —

■ ■ 平成25年度総会・特別講演 ■ ■

「自然災害と地質リスクの軽減—抄録+電話取材」
～我が国の抱えている問題点と“地質屋”の役割～

野崎さんからは、地震・活断層・地滑りという地学用語が頻繁に見受けられる昨今、長年“地質屋”として経験してきたことを、パワーポイントの画像と共にお話しいただいた。加えて、青森県六ヶ所村で地質調査中の野崎氏に補足説明を受け、文章化しました。

講演は、次の4点に絞って展開されました。①地質リスクとは、②島根半島の活断層と地質リスク、③我が家の地盤と地盤改良、④落橋原因となった岩盤の側方移動という要旨です。①の地質リスクとは、「ある脆弱な地質条件を持った人間の地域生活圏に、災害が発生する可能性(リスク)の高さ」を示しており、また②に関しては、島根半島には無数の地滑り帯があり、延長50^{km}に及ぶ宍道断層が島根原発の2^{km}南を東西に走っているようすなどが、地図等で紹介されました。

講演内容は、パワーポイントによる図版(PDF)がなければ文章だけではわかりにくく、説明も明解さを欠くので、福岡三郎幹事の手になる東京双松会のホームページをご覧ください。東京双松会のホームページ《<http://www.tokyo-soshokai.org>》に入っただき、「東京双松会報告(第58回)」をクリックし、次に文中の「野崎さんの講演の概要はココ」と書かれてある「ココ」をクリックして下さい。直接には《<http://www.tokyo-soshokai/soushoukai09/nozaki.pdf>》で、解説PDFにたどり着けます。

* * *

以下は、野崎氏と電話やメールでやりとりした内容です。

まず最初に、“地質屋の面目躍如”といったエピソードをひとつ。

野崎氏は、カナダのカルガリーで開かれた地質学の国際会議に出席するため、夜10時、空港に降り立った。そのとき、税関(イミグレーション)で係員から高圧的な態度で細かい質問を受ける羽目になった。現地見学会も予定されていたため、リュックを背負ったラフな格好が目立ったかもしれない。ところが旅行目的を聞かれて答えたところ、「それではあなたは地質学者なのか」と聞かれ、「イエス」と答えた途端、相手の態度が一変、低姿勢で通してくれたという。似たような振る舞いは、イギリスやオーストラリア、ヨーロッパ各国で何度も味わったという。

世界的には地質学者の地位とはそうしたものであり、中国の温家宝首相も地質学者出身だという。けれども我が国では、国交省の地方整備局長になったという話すら聞いたことがない。我が国では地質学に対する偏見が定着してしまったのか、それが地質リスクあるいは自然災害への備えを遅らせている



要因の一つになっていると危惧している。10年前に訪スロバキアではトンネル掘削のための経済的なルートのため、数本のテスト杭を掘っており、その所長は“地質屋”だった。岩盤崩壊を避けるため、スコットランドの路工事では、若い女性の地質屋さんが、ジープを駆って管理を行っていたという。しかしながら我が国の場合、程度の地質調査は参考にされるものの、まずルートが決まり、それを前提に地質調査が行われるというのが一般的という。

ところが3.11の東日本大震災以降、「万にひとつの事」が発生した結果、状況は一変した。若い頃一度だけ、東力の新潟県・巻原発の地質調査に従事したという野崎氏最近になって活断層などの地質調査依頼が殺到している。

とはいえ、活断層に対する定義はまだ曖昧であり、実態はよく掴めていない。野崎氏にとっても「(活断層が)動くときも同一の断層だけが同じように動くのか?」だはずの断層はもう動かないという保証があるのか?」い断層がこれ以上ふえないと考えていいのか?」そうでなら、なぜ日本国中にこうも多くの活断層があるのか?」現場の最先端で調査しながら、疑問は尽きないという。

そして最近、ある意味で活断層とは対局にある「ノンティック断層」という問題に取り組んでいるとのこと。などによって形成される断層で、地殻変動によらない、を生ずるほどの地震動を伴わない断層で、活断層解明のになる可能性をもっているとし、近々、専門書を出す予定

ただ最近、行く先々の調査現場(とくに原発関係)で、調査を行っている人たちは、野崎氏と同様、退役の地質者ばかりが目立ち、若い人たちの現場離れを反映しているようで、将来が気がかりでもあるという。

(文責・長谷)

のぎきたもつ プロフィール: 1946年生まれ。地質学者。日本地すべり学会、日本応用地質学会会員。地球科学賞(地学団体研究会)、功労賞(北陸地質学会)、地盤工学貢献賞(地盤工学会)を受賞。

ふるさと巡り IN 東京

へるん先生と小泉八雲記念公園(大久保)

《松江の一日で最初に聞こえる物音は、ゆるやかで大きな脈搏が脈打つように、眠っている人のちょうど耳の下からやって来る。それは物を打ちつける太い、やわらかな、にぶい音であるが、その規則正しい打ち方と、音を包み込んだような奥深さと、聞こえるというより寧ろ感じられるように枕を伝わって振動がやって来る点で、心臓の鼓動に似ている。それは種を明かせば米搗きの重い杵が米を精白するために搗き込む音である》(『神々の国の首都』、森亮訳、平川祐弘編・講談社学術文庫)

杵を搗く音に続いて、カランコロンという下駄の音、物売りの声、梵鐘の響き……横浜から蒸気機関車や人力車を乗り継いで遙々やってきた松江。この紀行文は、富田旅館(現・大橋館)に泊まった次の日の朝の光景を、音で描写することから書き起こしている。鳥根県との契約にあたっては、契約書にはカタカナで「ヘルン」と書かれていたが、これを素直に受け入れた。鳥根県松江尋常中学校、同師範学校の「へるん先生」の誕生である。

ちなみにこの紀行文の訳者・森亮氏は、旧制松高・鳥根大学の英語教授であり、「ルバイヤット」や「小泉八雲作品集」の翻訳で知られる。付け加えれば、松江北校16期の同窓生の父君でもあった。

多神教の国・ギリシャで生まれ、妖精の国・アイルランドで育ったハーンの日には、異端の神々が住み給う神仏習合の世界は果たしてどのように映ったのだろうか? なぜ、日本に愛着を抱いたのか? イザベラ・バードのような、和食を毛嫌いだした人はと



もかく、チェンバレンやウェストンなど来日外国人たちの“日本印象記”をまとめた名著『逝きし世の面影』(渡辺京二著、平凡社ライブラリー)によれば、《子どもへのこんなやさしさ、両親と老人に対するこのような尊重、洗練された趣味と習慣のかくのごとき普及、異邦人に対するかくも丁寧な態度、自分も楽しみひとも楽しませようとする上でのこのような熱心——この国以外のどこにこのようなものが存在するといふのか》と、深い感銘を著している。旧日本の“おもてなし”の原点である。宍道湖の湖面に映る鳥影、朝霧や日没直前の夕陽の瞬きの……陰影の美しい城下町こそ、紀談の背景にふさわしかったのかもしれない。

冒頭の書には、普門院に伝わる怪談「小豆磨ぎ橋」や中原町の大雄寺の墓地にまつわる怪談「水船を買う女」といった、『紀談』の原型となるような作品が所収されている。

アイルランド出身の軍医の父とギリシア人の母の子として、ハーンはギリシアのイオニア諸島の一つ、レフカダ島で生まれた。日本に帰化した後は故郷に帰ることなく、新宿区大久保の地でこの世を去った。新宿区とレフカダ町は平成元年、友好都市となり、これを機に、新宿区はこの地に小泉八雲記念公園を作ったというギリシアのエンタシス様の白亜の柱と集会場(アゴラ)をイメージした広場の奥には、アイルランドのダブリンにあった2軒の住まいを刻んだ銘板のコピーが、白い壁に埋め込まれている。

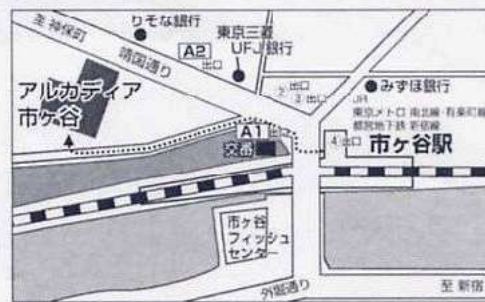
(文責・長谷川)

＝ 平成26年度 総会開催のご案内 ＝

1. 日 時 / 平成26年10月18日(土) 12:00~15:30
2. 会 場 / アルカディア市ヶ谷(私学会館)
東京都千代田区九段北4-2-25
TEL.03-3261-9921(代表)
3. 参加費 / 8,000円(学生無料)
4. 申込切 / 平成26年10月3日(金)

■特別講演*アルツハイマー病の予防と治療*

★講演者*田平 武(たひら たけし) S39年卒・15期、順天堂大学大学院教授*田平さんは長年、アルツハイマー病の研究に携わってこられ、とりわけ経口ワクチン開発では我が国の第一人者です。早期発見・予防・治療に関する最新知見をお話いただきます。



編集後記

河原校長は今年3月に定年退職され、かわって今年4月からは泉雄二郎氏が第23代校長に着任されました。そして4月12日には、平成25年4月に双松候補として認定された松(校門付近の松)の植樹(移植)が行われました。また、「ふるさと巡り IN 東京」では、当事務局長の中村氏より、調布の古本屋で見つけた貴重な本『ハーンの世界』(高木大幹著、東京図書出版会)や『へるん先生の汽車旅行』(芦原伸著、集英社インターナショナル)を借り受け、大いに参考にさせていただきました。『ラフカディオ・ハーンの世界』(池田雅之著、角川選書)に書かれた視点も参考になりました。

長谷川